

政治から戦いの拠点へ変遷か



鳥海柵の時代変遷などについて論を展開する本堂寿一氏（前列右）

金ヶ崎の国指定史跡鳥海柵跡

12

考察 全盛期の中心的建物

2017年度シンポジウムより

パネル討論要旨 IV

佐川 正敏氏

本堂さんから、縦街道南区域の四面廂付建物と原漆下区域の双堂との比較について、お話を願いたい。

本堂 寿一氏

建物跡そのものをどんなに調べても、どのように使われたのかを把握することはなかなか難しいことだろう。周りを見て、その建物

がどんな役割を果たしたかを考えなければいけない。すると、鳥海柵とは一体何なのか。

坂上田村麻呂が造った胆沢城の北西に、川を挟んであるのが鳥海柵。さまざまな研究で、胆沢鎮守府の機能が絶える状態になった時に、安倍氏が代わって奥六郡を治めたといわれている。

鎮守府の側にいた安倍氏の鳥海柵は、鎮守府の機能を継承したと考えたいと思う。鎮守府は、戦うための城ではなく、北上盆地を治めるための政治の中心。鳥海柵がそれを継承したのであれば、最初から戦うための施設として造ったのではないと思う。政治の拠点

として、鳥海柵が始まったのだろう。

秋田県の大鳥井山の柵とは出発点が違う。向こうは戦うための構えだが、鳥海柵はそうではない。政治の拠点として構え、世の中の動きに合わせて、戦いのための造りに変わっていったと考えるべきだと思う。

なぜ、鳥海柵がこの場所に構えられたかも考えてきた。一つは、胆沢城のそばであるということが大きな条件。二つめは、中央街道に接するところに構えられたのだろう。

平泉から青森県まで奥大道路という通りがあり、それは必ず胆沢城を通ったはずだ。胆沢城から北に向かい、胆沢川を渡る。道は真っすぐな方がいいが、浅瀬に向かって胆沢川を西側に上り、今の（水沢佐倉河）玉貫というところから二ノ宮

後に渡ったのではないか。それが当時の中央街道であり、中央街道に接するところに鳥海柵が構えられたと考えている。

鳥海柵がどのような造りだったのか。千田嘉博先生がおっしゃったが、それぞれの区画でそれぞれの機能を持っていたのではないのか。鳥海柵と大鳥井山を比べた時に、鳥海柵は自然の沢を利用して造った。それに対し、大鳥井山は堀をどんと周りに巡らせて造ったという大きな違いがある。

鳥海柵は、沢でそれぞれ分割しており、一番南（二ノ宮後区域）は、鍛冶職人が使っていた。その北の鳥海区画が一番広い。ここは本来であれば大きな建物を建てるべきだが、建物跡が見つかからない。ここは、軍営、軍事的スペースだったと考えている。（つつく）

登壇者

コーディネーター
佐川正敏氏
パネリスト

千田嘉博氏
（奈良大学教授）

本堂寿一氏
（国史跡鳥海柵跡整備委員会委員長）

大平 聡氏
（宮城学院女子大学教授）

相原康二氏
（えさし郷土文化館長）

高橋 学氏
箱崎和久氏

（秋田県埋蔵文化財センター副所長）
（奈良文化財研究所都城発掘調査部遺構研究室長）